

川喜田二郎著 『鳥葬の国 秘境ヒマラヤ探検記』

半世紀以上も前にこの著作の初版本（カッパ・ブックス/1960 刊）が出版された時、折からの探検ブームや秘境譚が盛り上がり始めた時期だったことも手伝って、年配の方なら本書の題名の何やら秘儀めいた“鳥葬”に惹かれてこの本を手にした方々も多いのではあるまいか。

実は私も確か大学1年か2年だったかの頃に、怖い物見たさでこの本を読んで実地の鳥葬の息詰まるような様子に背筋が凍った記憶がある。鳥葬のことだけでなく、ネパールの奥地のそのまた奥地の外国人が未だ入ったことがないような未知未開の秘境集落で生活しているチベット族の習俗や生活の様相も新鮮で興味あるものだった。

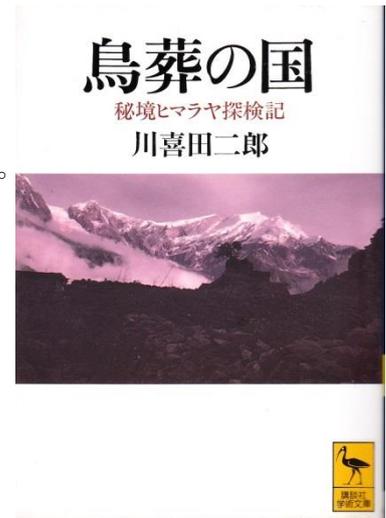
当時は探検物がもてはやされた頃で、ブッシュマンなどのアフリカ先住民族の探検（京大探検隊）、本多勝一によるニューギニア高地人やカナダ・エスキモー探検記などを読んで遠い世界の秘境への興味を揺さぶられたものだった。しかし、当時は海外に旅するなどということは夢のまた夢で、私などにはとてもそのような機会が訪れることは生涯なかろうと思っていたが、何の因果か海外登山や旅行でヒマラヤの奥地や南米、アフリカなどの辺境を10数回訪ねることができた。

さて、この探検記は昭和時代の半ばに、ネパール中部にあるネパール第2の都市ポカラからカリガンダキ街道を遡って、チベットとの国境に近いドルポという地の果てに住むチベット族の学術調査を行った際の彼らの生活や習俗の記録である。このネパールの奥地は、南側をダウラギリ・ヒマール、北側をハムガ・ヒマール、西側をカンジロバ・ヒマールという大山塊に囲まれ、また東側はつい最近まで禁断の王国として鎖国されていたムスタンに接している辺境である。

この探検は、当時の京大大学生物誌研究会という京大探検グループの元締めと日本民族学協会の後援によるものではあったが、この探検隊は本来個人的・自主的な探検隊であり、また、本書は探検隊としての公式報告書ではなく非公式な探検記であったから、書かれている内容も殆どが現地の人びととのナマの交流を中心としたもので、それゆえまた彼等との付き合い方の模様、彼等の価値観や文化の違いによる衝突、彼等自身の集団の中の揉め事なども筆を濁さずに書かれていて興味深い。また、探検隊自体の集団の中での隊員それぞれの確執などの内幕も遠慮なく書かれていて、探検隊という集団を纏めていく難しさも一見できた。

しかし、現地の人びととのトラブルや隊員間の揉め事などの一見暗い話題でも、アッケラカンとした明るさとユーモアの筆致で書かれているのは流石である。

光文社カッパ・ブックス 1960 刊、講談社 1974 刊、講談社学術文庫版 1992 刊



[「山書の小溪」目次に戻る](#)